「キリスト・イエスのうちにある思い」

2024.12.29

2024 年最後の主日礼拝です。1 年があっという間に過ぎてしまったと思いました。今年を振り返ってみれば色んな神様の助けと守りがあったと感じます。その神様の働きに感謝し、また新たな一年に向かう力を得る礼拝となることを願います。

今日の聖書箇所をお読みいたします。

[ピリピ人への手紙 2:1-5]

1.ですから、キリストにあって励ましがあり、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、

2.あなたがたは同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、思いを一つにして、私の喜びを満たしてください。

3.何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。

4.それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。

5.キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。

背景を少し説明いたします。

＜一.ピリピ人への手紙の背景＞

ピリピの教会はパウロが東ヨーロッパで最初に建てた教会で、それについては使徒の働き 16：12 から確認することができます。ピリピはローマの植民地下にあった都市です。ローマの退役軍人が沢山いて、愛国主義者が多い都市です。ですので、この都市はローマの色がとても強く、ユダヤ人は少なかったようです。婦人たちが祈りの場を作ってそこで礼拝し始まったのがこの教会の始まりでもいえるでしょう。4 章に二人の女性のリーダーの名前が出るところから推測できるのではないかと思います。

この都市は愛国主義者が多いので、パウロが「イエスが神であり、王だ」と宣べ伝えていると、その反発を受けていました。その反発や迫害の中でもこのピリピ教会は神に向かって熱心で、キリストを伝えようと努めている教会でした。パウロは獄中でこの手紙を書きましたが、ピリピの手紙のテーマは「喜び」だとよく言われています。

この都市に住む人々にとって、ローマの市民権というものはとても重要なものになっていました。 ローマの市民権を持つことによって、彼らが受けることができる特権がたくさんあったよ

うです。ピリピの信徒たちもそのことをよくわかっているのですね、そのためか、パウロはピリピ人への手紙の 3:20 で私たちの「国籍は天にある」と強調しています。天の市民権を持つ私たちには違う意味での特権と義務あると伝えたかったのではないかと思います。

この手紙では色んな話題について触れていますが、その中の一つはピリピ教会のある問題について取り上げているものがありました。それは分裂でした。どのような分裂なのか、1:17 からこの分裂は党派心による分裂であることがわかります。キリストを伝え、神のための働きをしているが、その中には党派心によって行っている人がいるとのことです。 パウロは、ピリピ教会が直面しているこの課題について、私たちは天に国籍がある人々として、どのようにすればよいかを勧めているのが今日の本文になります。

<二.一つにして>。

まず 1 節です。

2 つの部分に分かれていて、前半は人間的な側面、つまり、パウロがピリピ教会の信徒たちに対する励ましと愛に焦点を当てています。

私の励ましの言葉が、あなたが過去に信仰を堅持するのに役立ったなら、現在もそうしなさい。私の愛が苦難の中で慰めとなったのなら、今、私の要求にふさわしい反応を示しなさい。といういみではないかと思います。

また、後半は神との関係についてのものです、つまり、聖霊によって生じたピリピ信徒たちの交わりに焦点を当てており、神様が彼らを暖かい愛情と憐れみで包んでくださっていることを言っていると思います。

あなたがたは、聖霊のために生まれた共同体に属しており、その結果、相互の交わりを享受しているのなら、それにふさわしく生きなさい。と

神様を受け入れクリスチャンとなった人々にふさわしく生きることを勧めています。「天に国籍を持つ人」としてふさわしい歩みをすることをすすめているわけです。

次は 2 節です。ここで「一つにして」と書いてある部分がありますが、パウロは 1:27 でも「一つ」というテーマをとりあげたことがあります。 まず 1:27 の「一つ」についてみてみます。

[ピリピ人への手紙 1:27]

ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい。そうすれば、私が行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、あなたがたについて、こう聞くことができるでしょう。あなたがた

は霊を一つにして堅く立ち、福音の信仰のために心を一つにしてともに戦っていて、

福音にふさわしく生活しなさいとこの節でも勧めているわけです。ピリピ教会は周りの環境から迫害を受けていたので、このようなことに立ち向かう時に、「一つにする」ことはとても大事なもので、必要な装備であることを強調しているのです。一つであることは、この世界に対抗する有用な武器であるだけでなく、クリスチャンの生活の本質に属するということであるとのことです。

それから、2 章に入ってからの示している「一つにして」は、「パウロの喜びを満たすものである」と語っています。先ほどの 27 節の「一つ」には「固くたつ」、「戦う」などの要素があります。外に向けての行動、外的なものを指しているようにみえます。2:2「一つ」になる要求は外的な何か行動ではなく、「内的なもの」という印象を受けます。パウロは「思い、愛の心」など、クリスチャンの内的な態度について言っているのです。 そして、このような内的な部分での「一つ」を勧めているようです。

では、ピリピ教会の内的「一つに」を妨げているものは何だったでしょうか？

それは 3 節からヒントを得られると思います。

3.何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、

ここにある「利己的な思い」とは、1:15 節にある「党派心」と同じ言葉を使っています。彼らはキリストを伝えているが、ある人達はこの党派心を持って伝えた、「競争意識」のようなものがあったようです。このような競争意識は、キリストを伝えることはできるが、教会内の和解を壊すことになり、パウロもこれによって苦しいと言っているのです。

続けての虚栄というのは「虚しい見解」「誤り」を基本的な概念としています。空虚(くうきょ)な驕(おごり)り（得意になって、たかぶること。わがままなふるまい。）根拠のない自信、利益のない見解などを言うのです。それが動機になって動く人は、正しい見解を持っていると傲慢に主張しますが、実はあやまりに陥っている人たちです。そのような人は、理由もなく驕りに陥り、妄想にとらわれ、名誉を欲しがり、他人を妬(ねたみ)み、嫉妬(しっと)し、他人と競争しようと挑戦する人たちでもあります。したがって、自分の考えが正しいことを証明するために戦おうとする人たちでもあるということです。

実際「党派心」を持っていてもキリストは伝わるのです。効果が見えるのです。伝道して人がキリスト信じるわけです。ですが、クリスチャン同士が互いに自分の正しさを主張し、相手を顧みないことについてパウロはとても苦しんでいるのです。

ピリピの信徒たちがキリストを伝えるのに熱心だったが、「一つ」になれなかった背後には、福音について熱心だがこのような人間的な要素が含まれていたのだと思います。パウロは、誰であれ何であれ、自慢しようとする欲望をやめるように要求して、各自が自分を振り返り、そうなった可能性（党派心や虚栄）があったならば、それを反省するように要求していると思います。無駄な虚栄心があるところには、どんなに良いことをしようとしても、例えそれが神様のための働きであり、その働きがよい成果を出したとしてもその中には「一つ」になることができないのです。キリストは伝わるが、苦しめていることになるでしょう。

それからパウロは「へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。」という積極的な励ましをしているのです。この節については後ほどもう一度詳しく考えてみます。

＜三.キリスト・イエスにあるこの思い＞

5.キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。

またパウロは模範の例を挙げています。キリスト・イエスにある思いを抱くように勧めています。では、キリスト・イエスにある思いとは何でしょうか？続く 6-11 にそれが書いてあると思いますが、6-11 賛美歌或いは詩だとも言われています。パウロがピリピ教会への手紙を書く時、おそらく当時よく歌っていた賛美かもしれません。

[ピリピ人への手紙 2:6-11]

6. キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、

7. ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、

8. 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。

9. それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。

10. それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、

11. すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。

イエス様が示された模範は何でしょうか？

キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないと考えず。とあります。

これはアダムと真逆な姿です。創世記で蛇がいう「その実を食べる時、目が開かれて、あなた方が神のように善悪を知るものとなる」この言葉に、アダムは神様と対等になろうとしました。結果罪が全人類に及びました。その以降の人類はアダムと変わらないです。バベルの塔も同じです。「いただきが天に届く塔を建てて、名をあげよう」と言ったのです。天に届くように、名をあげよう。高く、高く、神に届く、神になるです。

しかしそれと反対にイエスキリストは神である立場をその権利を主張せず、むしろそれを捨てて、人になったのです。創造主が被造物になったものはどのように説明しても説明するようがないと思いました。それだけでなくすべての人に仕えるものとなり、ご自分を低くしました。従順にしたがい、十字架で殺されたのです。ですがこの死が逆転となり、高く上げられたのです。ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、自らを低くして、死にまで。と

高く、高くいく人と違って、イエス様は低く、低くいくのです。私、私と主張する人と違って、自分を空しくするのです。ですが、それによって「高くあげられています」

これが堕落した人間世界の原理と違う「天の御国の原理」かもしれないです。

このようなイエス様のシモベとしての働きはすべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白する場面につながり、それが神様の栄光となったのです。

ピリピ教会が熱心な教会だと伝えました。彼らはローマの迫害を恐れることなく、キリストを伝えるほどに勇気があって信仰がある人達でした。彼らが目標していた、伝道、つまりイエスキリストを伝えるこの働きは党派心―自分たちのやり方の正しさを出張したかもしれないと思いました。ですが、パウロはこの面においてシモベとなったキリストイエスに習うことを勧めします。

パウロも同じです。彼は他の手紙では「使徒であるパウロは」と始め自分が「使徒」であることを紹介する時があります。ですがピリピ人への手紙では「キリスト・イエスのシモベであるパウロ」と私もシモベの姿を取っていると表しているようにもみえます。(1:1)

＜四.自分よりすぐれた者＞

パウロも対外に向けては一つになって戦くことをすすめ、クリスチャン同士の間は内面的な態度の次元においてお互いを自分より優れたものとみることで、仕えることで、一つになることをすすめているわけです。

「3.へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。4.それぞれ、自分のことだけ

でなく、ほかの人のことも顧みなさい。」

へりくだる面においてもイエスキリストが見せた模範は、「他人を自分より優位に置くこと」それ以上のものであります。

例えばこのようなことです。ある人がいるとしましょう、その人はすべての人が喜んで頭を下げるような「善良で、賢明で、真面目で、敬虔な、そして優秀な」人であればその人の前で「へりくだる」ことは難しくないと思います。ですがここで言っているのは条件付きではないです。このような良い特性が欠如している者まで含めてその人の前で「へりくだる」ことです。

このようなことを考えてみましょう。イエス様が自らを低くし、仕えることになったのは、私たち人間には神様の基準からの「少しでも仕えられるにふさわしい姿、少しでも尊重される姿、少しでもよい姿」があって仕えたでしょうか？いいえ、一切ないのに仕えてくれました。神様の基準からは私たちは滅びる存在です。

ですが、私たちは、ある人の前でへりくだるためにその人の自分基準の「良い所」を探し、見つけて自分を納得してから、へりくだる癖があるのです。ですので、クリスチャンになってへりくだれないといけないけど、どうしても難しい場合は、頑張って相手の「良い所」を見つけようとしました。もちろんこれらもよい努力です。ですが、クリスチャンは互いに相手を「無条件的に」尊重しなければならないとパウロはいっているのです。

ピリピ教会の分裂の問題は「こういう根拠があるから尊重できるとか、こういういいところがあるから尊重しあいましょうでもなく、例え相手にいいところが一切なくても、何の根拠もなくても　尊重しあえる時」解決されるでしょう。言いたいのは分裂の根本的な問題は相手の「能力や良さに」あるのではなく、自分の心の態度の問題です。

お互いが低くなることを選び、自分より相手を良く思えというのがパウロの勧めであり命令だと思います。「天の国の市民権」を持つ私たちのふさわしい反応ではないでしょうか。このような歩みにこそ神様の栄光が地上に現れるのです。

私たちはどのようなことがうまくいったのか、うまくいかなかったのかをよく判断して考えます。１年間の様々な活動を通して、私たちはどのようなことを振り返り、どのようなことをより良くするために努力しているのでしょうか。外に向けては「一つ」になってキリストを伝えること。中に向けては「一つ」になって互いに仕えることではないでしょうか。

一年間主の中で一緒に生活してきた信仰の同労者の苦労を認め結果が良かったであれ、悪かったであれ、「無条件的に」互に低くなり、シモベの姿を取り、仕えあうキリスト・イエスの思いを抱きたいのです。

＜まとめ＞

私たちは「天の国籍を持ち」地上の歩みをする者たちであります。私たちはキリストがこの世に広く伝わることを願い、祈り、働きかけるものです。神様は私たちの姿を通してその栄光を表し、ご自分の伝道の働きをなさいます。そして私たちが抱くべき思いも教えてくださいました。それは「へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思う」思いです。無条件的に優れたものと思うことです。イエス様がご自分の姿を捨てシモベとなられた姿を思い出し、その思いを抱き、実践し「国籍が天にあるもの」として歩みましょう。

この今年最後の礼拝で、今年のすべての活動や生活を守ってくださったことを感謝し、また自分自身を振り返り、イエス様の思いを抱き新しい一年を迎えて進んでいきたいと思います。